

長田夏樹ノートブック解題(1)

長田俊樹

1. はじめに

このたび、亡父長田夏樹が残したノートブックが古代文字資料館のサイトにアップロードされる運びとなった¹。

インターネットサイトへのアップロードは、吉池孝一愛知県立大学名誉教授と古代文字資料館の関係者のご厚意によるものである。まず関係各位の皆様方には感謝の意を表したい。吉池名誉教授たちのご厚意に報いるために、こちらでわかる範囲で解題を書いた方がよかろうとの思いから執筆を思い立った次第である。

ご厚意に報いるというだけではない。他にも書こうと思いたった理由がある。じつは、筆者自身は日本言語学史に関心を寄せてきた。これまでに、日本語系統論がはやらなくなったことをテーマにしたり²、明治時代の日本語系統論をめぐる問題を論じてきた³。また、2016年度には日文研(=国際日本文化研究センター)で「日本語の起源はどのように論じられてきたかー日本言語学史の光と影」という共同研究会を主宰し、その成果本を三省堂から出版した⁴。さらに、比較言語学の用語 reconstruction の訳語をめぐる日本言語学史についても論じたし⁵、2023年3月には『上田万年再考：日本言語学史の黎明』(ひつじ書房)を上梓したばかりである。

父の時代、言語学がどのように学ばれてきたのか。そのことを知ることは、筆者自身の日本言語学史の研究にも大きな成果をもたらすのではないだろうか。じじつ、父が残した資料から、菊池慧一郎という学者の一端を知ることができたし⁶、石濱純太郎の周辺で活躍した人々についてもいろいろとわかってきた⁷。また、夏樹のノートブックをみることで、小幡重一という工学畑の音響学者が金田一京助や小倉進平の音声进行分析していたという事実を初めて知った。今の時代の日本言語学史ではまったく登場しない人が、今でいう音響音声学の先駆者として活躍したことをこの解題を書くことではじめ

¹ 以下がそのサイトである。

<http://kodaimoji.her.jp/shiryoko/notebook.html>

² 長田俊樹(2003)「日本語系統論はなぜはやらなくなったのか」長田・ボビン編『日本語系統論の現在』国際日本文化研究センター。373-418頁。

³ 長田俊樹(2017)「はたして言語学者がふがいないのかー日本語系統論の一断面」井上章一編『学問をしぼるもの』思文閣出版。10-29頁。

⁴ 長田俊樹編著(2020)『日本語「起源」論の歴史と展望』三省堂。

⁵ 長田俊樹(2021a)「再構」再考ー日本言語学史の一断面』『国立国語研究所論集』21:41-64。

⁶ 長田俊樹(2021b)「知られざる言語学者・菊池慧一郎ー日本言語学史外伝(1)」『KOTONOHA』219:1-19。長田俊樹(2021c)「知られざる言語学者・菊池慧一郎 補遺」『KOTONOHA』220:29-37。

⁷ 長田俊樹(2021d)「大阪言語学会要覧について」『KOTONOHA』228:1-19。長田俊樹(2022a)「大阪言語学会会報について」『KOTONOHA』230:1-32。長田俊樹(2022b)「静安学社の講演について」『KOTONOHA』231:1-30。長田俊樹(2022c)「石濱シュレーに集う人々ー四半世紀後に」『日本研究』64:123-158。

てわかったのである。

この解題を書くことについて、最初に申し上げておきたいことがある。それは父が専門としたアルタイ諸言語について、筆者はまったく何も知らないずぶの素人である。正直言って、モンゴル語や満州語はおろか、ロシア語や中国語もまったく知らない筆者が解題を書くのは無謀である。どこまで信頼できるのか。そう疑問を持たれる方も当然出てくるだろう。そこで、なるべく可能な限り、筆者の知り合いである言語学者たちにそれぞれ専門とする分野での解題をお願いした。また、筆者のまちがいを正してもらうために、コメントをいただいた。以下に解題を書いてくださった方や専門的な見地からコメントをくださった方のお名前をあげておく。

1. 0303 モンゴル語関連。
2. 0307 碑文音写関連。
3. 0313 モンゴル語諸方言関連。
12. 0333 諸言語雑記関連。

以上、栗林均東北大学名誉教授⁸からコメントをいただいた。

5. 0316 エスペラント学習関連。
50. 準接頭語(エスペラント)

この二つのエスペラント関係のノートについては、藤原敬介帝京科学大学准教授が解題を書いてくださった。

7. 0323 カレン語分類関連。

カレン語の専門家である加藤昌彦慶応義塾大学言語文化研究所教授⁹が解題を書いてくださった。

12. 0333 諸言語雑記関連。

⁸ 筆者が総合地球環境学研究所在職中、2004年7月4日、ミニシンポジウム「ユーラシア言語史の現在」で、栗林さんに『アルタイ語族』について」と題する発表をおこなっていただいたことがある。そのときの報告書が筆者の手元にあるので、興味のある方は差し上げますのでご連絡ください。このときすでに存じ上げていたことはまちがいないが、いつ頃知り合ったかについては、はっきり覚えていない。栗林さんはご自身の業績や辞書検索システムなどを以下にアップしている。

<http://hkuri.cneas.tohoku.ac.jp/>

今回久しぶりご連絡申し上げたにもかかわらず、コメントを寄せてくださったことを心より感謝する。

⁹ 加藤さんにいつ頃知り合ったのかは、はっきりしないが、民博在職時代にお目にかかったように記憶する。その後、大阪外大(現在大阪大学外国語学部)のビルマ語の先生をやっておられる頃には、筆者が非常勤講師をしていたこともあり、何度か尋ねたことがある。加藤さんの業績も以下にアップされていて、いくつかのファイルはダウンロードできる。

<http://user.keio.ac.jp/~kato/>

この草稿を読んだ加藤さんによると、「私が民博に勤めているとき、京大で開かれた日本言語学会で初めてお会いしたと思います。長田さんと私が同じセッションで発表しました。言語学会のウェブサイトで見ると、1997年の10/11と10/12に京大で第115回大会が開かれています。当時は発表が二日目でしたから、長田さんと初めてお会いしたのは、1997年10月12日で確定だと思います」との連絡をいただいた。また、「私はあらかじめ長田さんの予稿集の論文「ムンダ語の経験的動詞構文について」を拝読し、理屈っぽい神経質そうな細身の青年を想像していました(笑)。案に反して穏やかそうな方だったので安心したのを覚えています」と感想を寄せていただいた。こちらがまったく覚えていないことを鮮明にご記憶しておられたので、恥ずかしい思いでいっぱいだ。ありがとうございました。

ここにある「諺文の起源及び朝鮮語の特質 小倉進平 非売品 昭和 10 年 中央朝鮮協会」について、小倉文庫をよく存じ上げている福井玲東大教授¹⁰にコメントをいただいた。また、チベット語関連の記述については、林範彦神戸市外国語大学教授からコメントをいただいた。

なお、中国語と書かれたファイルについては、中国語の知識もなければ、インターネットさえ検索できないので、さすがの筆者も解題を書く勇気はない。そこで、濱田武志神戸市外国語大学准教授に解題を書いていただくことにし、濱田准教授も快諾してくださった¹¹。

以上の方々にはこの場を借りて謝意を表したい。

筆者がこの解題を書こうと思った理由がもう一つある。

じつは、『上田万年再考：日本言語学史の黎明』を執筆時にわかったことだが、古い文献はインターネットでアップされているということである。

たとえば、クラプロートの『アジアポリグロッタ』(Julius Klaproth 1823 Asia Polyglotta)という有名な本がある。この実物を日本で手に入れていたのが石濱純太郎博士である。父の手元に残った石濱博士からの昭和 26(1951)年 3 月 9 日付のハガキに、この Asia Polyglotta を貸していたと思うが、それを九州大学の吉町義雄氏に送るようにという内容のハガキが残っている。この本が日本にほとんどなかったのが、石濱博士のご厚意でそれを共有していたことがうかがえる。ところが、今の時代では著作権が切れた昔の本はネットに PDF がころがっていて、簡単にダウンロードして手に入れることができる。このアジアポリグロッタも例外ではない。世界的にみると、いくつかのサイトにアップされているが、じつは日本のサイトにもアップされている。大阪府立図書館には、東大言語学科の出身で、蔵書家として知られた市河三喜の所蔵本が市河文庫として収蔵されている。この『アジアポリグロッタ』も市河文庫にあり、大阪府立図書館の「おおさか e コレクション」として、以下のサイトでみることができる。

http://e-library2.gprime.jp/lib_pref_osaka/da/detail?tilcod=0000000025-00031379

昔はいかに文献にアクセスするか。また貴重な文献をいくつ持っているか。それを含めた学問だった。父も例外ではなく、結構珍しい文献を持っていた。世界的モンゴル語学者のワルター・ハイシヒ (Walther Heissig 1913-2005) が父を訪ねて家にやって来たことがあった。そのとき、父所蔵の拓本類をみて Wunderbar! と叫んだという。その話を嬉しそうに語る父から何度も聞かされた。それら拓本類は革製の古いバッグに入れられていて、火事になったらこれを持ち出すように息子にまで言い聞かせていた。

その拓本類は吉池孝一・中村雅之・長田礼子編著 『遼西夏金元対音対訳資料選』として、古代文

¹⁰ 福井さんにお会いしたのは、2001 年、日文研での共同研究会「日本語系統論の現在」だと記憶している。朝鮮語専門家を探していたところ、峰岸真琴東京外大 AA 研教授に紹介されたように思う。福井さんも御自身の研究などを以下にアップされている。ただし、2023 年 3 月で定年を迎えたため、このサイトもなくなる可能性がある。

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~fkr/>

¹¹ 2001 年、筆者が東京外大 AA 研の夏期言語講習としてムンダ語を教えた時の受講生だった、小林正人さん(現在、東京大学教授)から濱田さんをご紹介いただいた。ハラスメントになっては元も子もないので、いやだと思われたときはやめていただいて結構だとお伝えしている。また、現在の大学はいろいろと忙しいようなので、急がずに書ける範囲で書いていただくことにした。

字資料館から出版していただいた。また、拓本の目録については以下のサイトにアップされている。

<http://kodaimoji.her.jp/pdf10/yoshiike115.pdf>

これも吉池名誉教授のご尽力によるものである。何と御礼を申し上げたらよいか、感謝の言葉もない。

時代は変わった。筆者自身は父の専門とする言語がまったくできないが、インターネットを駆使すれば父が引用している文献に家にいながらアクセスできる。その情報をこの解題で示せば、それなりの意味があるのではないか。そんな思いもあって、門外漢ながら、解題を書くことにしたのである。

2. ノートブックの背景

我々遺族の手に残された父のノートブックは大量である。今回ネットにアップしていただいたもので 93 冊（ただし紙切れの走り書きのようなものを含む）ある。しかし、まだ発見されていないノートブックが見つかるかもしれない。

ノートブックにはタイトルがあるものとないものがある。父が付けたタイトルがあるものはそのままにしてあるが、タイトルがなかったものについては、こちらで便宜上付けている。ただし、内容がいろんな分野にわたるものも多く、「モンゴル語関連」という具合にやや曖昧にタイトルをつけている。通し番号の次にある番号は整理番号¹²なので、無視していただきたい。

残念ながら、ノートブックには日付がない。明らかに古いものもあれば、「26.1988 年中国語史」のように、神田外国語大学時代の授業用と思われるノートもある。

以下にあげるものが戦前に書かれたと思われるノートブックである。

3. モンゴル語諸方言関連

15. 数詞関連

22. 古代日本語関連。

26. Mogopobur 先生 (Todorović 先生に修正)

36. マレイ語

38. 印欧語

43. 菊池慧一郎先生

72. 土的古語

84. 蒙古語竹内幾之助教授

92. 梵語

3. モンゴル語諸方言関連とあるが、さまざまなトピックが扱われている。ここに出てくる論文がすべて戦前のものであり、ノートも戦前のものと思われる。父の処女論文である「上代日本語とアルタイ語族」(1943 年) に、『元朝秘史』の冒頭部分が出てくるが、このノートにも元朝秘史が登場する。

¹² このノートブックのデジタル化作業は林範彦神戸市外大教授がおこなってくれたが、その時の整理番号である。この解題は皆様のご支援ご教示のたまものである。

「はじめに」に書いた小幡重一もこのノートに登場する。

15. 数詞関連とあるが、これは「算術練習帳ノート」に書かれている。コトバンクによると、「教科名としては、1941年(昭和16)の小学校から国民学校への制度改革以来、算数とよぶようになった」とあるので、1941年以前のノートであることはまちがいない。父の弟岩雄のノートの可能性が高い。「上代日本語とアルタイ語族」(1943年)にも数詞が登場するが、数詞による系統論が成り立つと信じていた。ただし、我々インドの言語を学ぶものは数詞が借用されることをよく理解している。

22. NO-J-23 古代日本語関連とある。ここに出てくる論文はすべて戦前のものであり、「上代日本語とアルタイ語」のなかに、島尻村方言の例が出てくるが、それがこのノートに記載されているので、まちがいでなく戦前のものである。

26. 最初につけていた Mogopobur 先生というのはまちがいである。Mのようにみえるのはロシア語筆記体の T で、古い時代は英語の筆記体 M に似た字体が使われたようである。恥ずかしい話だが、間違って英語のように読んでこの題名になってしまった。しかし、書かれていたのはロシア語の筆記体であり、つまりトドロヴィッチ(Todorović)先生を指す。インターネットサイトに『東京外国語大学史』が掲載されているが、ロシア語学科の歴史によると、トドロヴィッチは1909年から1940年まで31年間東京外国語学校で教鞭をとった人で、ここにアップしたのはその授業ノートである。

36. マレイ語については菊池慧一郎から習った際のノートであろう。現在、マレイ語はローマ字表記であるが、父がならったのはアラビア文字を使ったものである。

38. 印欧語については、これも東京外語の授業を筆記したものであろう。父の在学中に、誰が印欧語を教えていたのか。スラヴ語に関する部分が大いことを考えると、八杉貞利(1876-1966)か、木村彰一(1915-1986)が考えられる。八杉は1937年に退官し、木村は1941年10月に東京外語に赴任しているので、木村である可能性が高い¹³。

43. 菊池慧一郎先生¹⁴と書かれたノートの内容はアラビア語である。冒頭に、「火曜 Qūran 金曜 千一夜」があげられているので、火曜日にコーランを金曜日に千一夜を学んだものと思われる。

72 土耳其語も菊池先生から習ったものであろう。トルコ語も現在ローマ字表記であるが、父がならったものはアラビア文字を使っている。

84. 蒙古語竹内幾之助教授について、竹内幾之助(1905-1946)は父がモンゴル語を習った時の先生である。この竹内の授業ノートである。「拓殖科 長田夏樹」と名前も表記されている。竹内の前任者、出村良一が30歳で亡くなったが、竹内も41歳で亡くなっている。戦前のモンゴル語の先生がお二人が早世している。なお、竹内幾之助と出村良一による『蒙古語四週間』が以下にアップされている。

<https://www.babelbible.net/pdf/mouko4w.pdf>

92. 梵語について、他の戦前に書かれたノートブックは定価拾参銭のものが多いが、このノートブックは SANSEIDO とある。あの三省堂がノートブックを製造していたのだろう。父から聞いた話で

¹³ 姉に聞いたところ、父は八杉先生からロシア語を習ったそうである。ただ、ここは印欧語なので、木村彰一ではないかと推測している。

¹⁴ 菊池慧一郎については、KOTONOHA 第219号に「知られざる言語学者・菊池慧一郎—日本語学史外伝(1)」を、第220号に「知られざる言語学者・菊池慧一郎補遺」を発表したので、詳細はそちらをご覧ください。幸いです。

は梵語の学習歴としては菊池先生にならった『パンチャタトラ』だけだということだったので、これも戦前のものと思われる。6 頁の短いもので、上記のアラビア語程は勉強しなかったように思われる。

以上が東京外国語学校時代までの、つまり戦前のノートブックである。

では、つづいて内容についてみておこう。

内容については、中国語の名前でタイトルになっているノートが一番多い。中国語の授業に使われた講義ノートが多い。

16, 17, 19, 21, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65 (13 ファイル)

中国語の方言についても、以下がある。

53. 蘇州聲音字彙 支那研究第 52 号「蘇州方言字彙及声調」坂本一郎より

76. 福州語ノート

93. 粵音字彙

94. 芬州語ノート.

中国文学についても以下がある。

39. 王司馬詩集.

40. 王昌齡詩集.

54. 宋詞ノート.

67. 張祜詩集

89. 遊仙窟研究.

90. 魯迅年表

中国語の音韻や甲骨文字、碑文などのファイルが以下である。

14. 0436 廣韻関連.

18. 0475 甲骨文字関連.

44. 元代白話碑.

46. 甲骨文字資料 01.

47. 甲骨文字資料 02.

中国語関連以外では、モンゴル語（蒙古語）に関するノートブックが多い。

1, 3, 8, 10, 11, 25, 83, 84, 85, 86, 87 (11 ファイル)

モンゴル語などの碑文については以下がある。

2. 0307 碑文音写関連

8. 0325 オルコン碑文関連.

23. NO-J-25 遼陵石刻集録など

56. 竹温台神道碑.

また、トゥングース語を含む満洲語関連としては以下がある。

- 24. NO-J-26 満洲語雑記.
- 32. トゥングース語.
- 33. トゥングース語ノート.
- 80. 満洲語雑記.
- 81. 満洲トゥングース語族研究小史.
- 82. 満洲語.

さらに、古代日本語や朝鮮語を含むアルタイ比較言語学関連として以下がある。

- 22. NO-J-23 古代日本語関連.
- 29. アルタイノート.
- 30. アルタイ比較言語ノート.
- 31. クリルタイノート.
- 37. モンゴル・トルコ比較語彙.
- 51. 捷解新語ノート.
- 68. 朝鮮語資料. (表紙に朝鮮語資料とあるが、朝鮮語は出てこない)
- 69. 朝鮮雑記.
- 73. 日朝比較語彙表 1.
- 74. 日朝比較語彙表 2.

以上、大雑把に分類を試みた。ただし、「45. 五四運動」といったものもあり、この分類に入らないものもある。

父のノートブックをざっと眺めて言えることは、父は言語学者 (Linguist) というよりは博言学者 (Philologist) だったということである。かつて言語学は博言学とよばれていたが、父はひろく言語を愛し、いろんな文字が大好きだった。我々の世代では、言語学といえばソシュールやチョムスキーに代表されるように言語理論を学ぶことから始まる。理論から学べば、とうぜんながら、言語理論好きが増える。言語データなどは二の次だと豪語する生成文法研究者までいる。その結果、現代の言語学者たちは、最新理論追跡症候群に陥ってしまっている。そんな理論とは無縁で、ただ次々と言語を習得しようとした父は博言学者と呼ぶにふさわしい。

高名な人類学者に「言語学者は言語ができない」と皮肉をこめて言われたことがある。この先生は学生時代、大阪外大から出講していた中西龍雄のインドネシア語を言語学主任教授泉井久之助と一緒に受講したのだが、その時の素直な感想をおっしゃっておられた。オーストロネシア語を専門とされた泉井がインドネシア語がプラクティカルにできなかったという衝撃的な話であるが、あくまでもこの人類学者の個人的感想である。ただ、似たようなことは父の口からも聞いたことがある。つまり、父はプラクティカルな言語の運用にも長けていたから、そんな感想を口走ったのかもしれない。

父がプラクティカルに言語ができたことについては、こんなエピソードがある。1996年、筆者が在外研究制度でメルボルン大学に10か月滞在した際、76歳の年齢にもかかわらず、父はメルボルンまでやってきてくれた。そのとき、メルボルン大学の中国人大学院生には中国語で会話していた。その中国人が方言の影響か、どうやら四声を間違えたのだ。そこで父はその四声の間違えを正したために、

その中国人学生は恥ずかしくなって立ち去ってしまった。父が何度も聞きなおしているのを傍で聞いていた筆者がそれに気がついて、父に中国人の発音を直していたようだと確認したら、それが事実だったのである。中国人に四声を正す。それは日本人が外国人に方言なまりを正されることと同様である。日本人だったらどういう態度をとるのだろうか。

また、こんなエピソードもある。西田龍雄教授と中国人研究者とともに会合で同席した際に、父は中国語で会話していたが、西田教授は中国語で話すことがなかったという。そこで、父は西田教授に向かって「君、中国語を聞けばわかるんだろ」と言ったのだという。大阪外語で中国語を習った、あの世界的な西夏語学者に対して、なんて言葉を発するのか。まるで作り話のような逸話だが、父から直接聞いた話なので本当なんだろう。それほど中国語会話には自信を持っていた。

ノートブックとは論点がずれてしまった。言語学会三大奇人長田夏樹のエピソードは尽きないが、脱線はこれぐらいにとどめておく。

3. 個別のノートブック解題

筆者の力不足ゆえ、とてもすべての解題が書けるわけではない。そこで、この解題を書く際に立てた方針を述べておく。

まず、筆者が調べるのはインターネットだけに限っておく。それほどどの労力を使わずに、調べることができることと、あんまり深追いして、全く見当違いのことを言い出しかねないので、そうした暴走を避ける意味もある。また、「はじめに」で述べたように、疑問点などが出てきた場合は、筆者が知る研究者に、積極的に聞きして、なるべく専門家の御意見を拾い上げることとする。

では、ここからはアップロードされた番号にそって、内容をみていきたい。ただし、今回は 20, までとする。それぞれのノートブックには頁番号を振っておいたが¹⁵、それを p. でしめた。

1. 0303 モンゴル語関連。

全 8 頁。表紙なし。モンゴル語より満洲語に関するものの方が多いので、満洲語関連とすべきか。p.1 最初の行に、aca-mbi「会う」 aca-na-mbi「会いに行く」 aca-nji-mbi「会いに来る」とあるが、これをインターネットサイトである Wikitionary で検索すると以下が出てくる。

Manchu

Etymology

(This etymology is missing or incomplete. Please add to it, or discuss it at the Etymology scriptorium.)

Pronunciation

(standard) IPA(key): [a.tʃ[᠎]am.pi]

Verb

ᠠᠴᠠᠮᠪᠢ • (acambi)

to get together; to assemble together; to integrate

to join; to connect; to interlock

¹⁵ 最初にアップロードされたファイルには頁番号はなかったが、栗林東北大学名誉教授に頁番号を振った方がよいのご指摘を受けたため、とりあえず、今回の 20. までの解題には頁番号を振っておいた。21.以降についても順次頁番号をつけていきたい。

to meet; to have a meeting
to have sexual intercourse; to copulate
to suit; to be appropriate for

今回、この Wikitionary というのを始めて検索に使ったが、いろんな言語が出てくるので面白い。ちなみに、私が知っているサンタル語やムンダ語などを検索してみたが、ムンダ諸語は登録されていないようだ。しかし、ヒンディー語などは Devanagari 表記と共に出てくる。もちろん、言語を知っている人からすると突っ込みどころ満載なのかもしれない。

ちなみに父がここにあげたうち、ala-mbi「告げる」isi-mbi「近づく」baxa-mbi「得る」は Wikitionary に掲載されていないが、tuwambi が以下のように出てくる。

Manchu

Etymology

From Proto-Tungusic *tugi-

Pronunciation

(standard) IPA(key): [tʰwam.pi]

Verb

ᡤᡠᡵᡠᡠᡩᡠ • (tuwambi)

to look; to see; to watch
to read; to peruse; to review
to regard; to look upon; to consider; to treat
to wait; to await
(auxiliary, after the infinitive) to try, to try out

Usage notes

(to try): This verb does not mean "to try hard" (e.g., "I tried to pass the exam."), but "to try out; to sample". Compare Japanese 見みる (miru) and Korean 보다 (boda).

この Wikitionary の面白いところは語源として Proto-Tungusic があがっていること、そして日本語と韓国・朝鮮語が比較として登場することだ。

なお、栗林東北大学名誉教授から、満洲文語のローマ字転写について、夏樹の表記とメレンドルフなどの表記がちがうというご指摘を受けた。夏樹 x に対し、メレンドルフ h; 夏樹 ô に対し、メレンドルフ ū。

p.2 「十干十二支」として、niowanggiyan「甲」nioxon「乙」fulgiyan「丙」fulaxôn「丁」suwayan「戊」soxon「己」šanggiyan「庚」šaxôn「申」saxaliyan「壬」saxaxôn「癸」。それに続いて、「子」singgeri「丑」ixan「寅」tasxa「卯」gôlmaxôn「辰」muduri「巳」meyihe「午」morin「未」xonin「申」bonio「酉」coqo「戌」indaxôn「亥」ulgiyan とある。これらはすべて満洲語である。十干は満洲語表記が先で、一方の十二支は先に子丑寅が先に書かれている。また、十干は甲乙の順が左右左右となっているのに対し、十二支は子丑寅が左に上から並べられ、午から右の上に移っている。

じつは、この満洲語の十干が長田夏樹(1984)「契丹語解読方法論序説」『神戸市外国語大学外国学研究』14号の33頁に掲載されている。

pp.3-4 この2頁には、モンゴル語の十干十二支が記されている。p.3にはモンゴル文字による表

記。p.4には「甲」 kökä 「乙」 kökägčün 「丙」 ulayan 「丁」 ulayačün 「戊」 šira 「己」 širayčün 「庚」 čayan 「辛」 čayančün 「壬」 qara 「癸」 qarayčün 「子」 quluyana 「丑」 ükär 「寅」 bars 「卯」 taulai 「辰」 luu 「巳」 moyai 「午」 morin 「未」 qonin 「申」 bäčün 「酉」 takiya 「戌」 noqai 「亥」 yaqai
この転写表記以外にキリル文字表記がある。

こちらのモンゴル語の十干も上記の長田夏樹(1984:33)に掲載されている。それによると、十干が色に関係があるという。甲 青 kökä、乙 淡青 kökägčün、丙 赤 ulayan、丁 淡赤 ulayačün、戊 黄 šira、己 淡黄 širayčün、庚 白 čayan、辛 淡白 čayančün、壬 黒 qara、癸 淡黒 qarayčün。

pp.5-6 満洲語の動詞パラダイム 横線が多数あり、よく判読できないところがあるが、1.は語幹とあり、2.mbi「不定現在形」3.me「形動詞現在形」などがあり、満洲語の動詞パラダイムと思われる。p.5には「行く」のp.6には「書く」のパラダイムである。

pp.7-8 チュルク語、モンゴル語、満洲語、朝鮮語、日本語の動詞語末の対応語彙表。日本語として、「su-ø, se-ri, si-nu, si-tu, siki; wori, woreri, worinu, woritu, woriki」をあげ、それぞれの対応語をあげている。日本語はアルタイ語族に属することを証明しようとしていたことがわかる。

2. 0307 碑文音写関連。

全45頁。表紙なし。

p.1 冒頭に「Dharmapāla 未亡人碑？」とある。未発表だと思われる、長田夏樹(1951)「八思巴文字中世蒙古語資料に就いて」のなかに、「パスパ文字蒙古語資料は、私の知る範囲では」として「9 荅刺麻八刺 Dharmapāla 未亡人碑 1321」(6頁)という記述がある。その碑文の音写である。

なお、以下、栗林東北大学名誉教授によるコメントである。

パスパ字関連では、よく知られている次のものに言及しています。

Poppe, Nicholas (tr. and ed. John R. Krueger). *The Mongolian Monuments in hP'ags-pa Script*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1957.

照那斯图『八思巴字和蒙古语文献 II 文献汇集』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1991.

ポッペの本(2010年の台湾から出たリプリント版)は以下からダウンロードできる。

https://altaica.ru/LIBRARY/Tumurtogoo_phags_pa2010.pdf

また、この碑文について、栗林さんによると、

Dharmapāla 未亡人碑の碑文は全18行からなるが、音写は10行目まで：

- ・ p.1--1~7 行目前半
- ・ p.2--7 行目後半~10 行目

参考：Poppe(1957):IV. The Edict of Dharmapāla's Widow, 1321(pp.54-55, Plate IV)

p.1 栗林さんがご指摘にしたがうと、上記碑文の1~7行目の音写。

p.2 が7行目から10行目の音写である。

p.3 冒頭に「陝西邵陽 光国寺聖旨碑 1319」とある。杉山(1990:26)「元代蒙漢合璧命令文の研究(一)」によると、「ウマの年(延祐5年戊午,西暦1318)4月23日. 邵陽県光国寺Ayurbarwada 聖旨(jarliy)碑.上都にて.(陝西省邵陽県)」とあり、シャバンヌの拓影と Lewicki(1937)、Ligeti(1972)や山崎忠(1954)「1318年の八思巴字蒙古語碑文解説—陝西邵陽県光国寺碑—」に言及している。夏樹は山崎忠と一緒に研究をしていたので、その当時のノートなのかもしれない。この碑文について、栗林さんによると、以下である。

「陝西邵陽 光国寺聖旨碑 1319」の碑文は全24行からなるが、音写は15行目まで

- ・ p.3-1~6行
- ・ p.4-7~11行
- ・ p.5-12~15行

pp.3~5 栗林さんのご指摘にしたがうと、光国寺聖旨碑のパスパ文字表記とその音写である。

p.6 左上に「16.」とある。栗林さんによると、「p.6の最上段に「16.」とあるのは、「光国寺聖旨碑 1319」の続き(16行目以降)を書こうとしたものと思われる」。

ただし、書かれている内容は別である。「村治派 梁漱溟」と「第三党 章伯鈞」だけが記されている。梁漱溟についてはウィキペディアによると、「梁 漱溟(りょう そうめい)は近代中国の思想家。祖籍は広西省桂林県。1911年に順天中学を卒業した。1917年、蔡元培学長に招かれ、北京大学の教授となり、インド哲学を講じた。その後、1928年に「村治」として提唱した自らの思想的実践を果すために、郷村建設運動に没頭し、儒教の精神に法った農村社会運動家、教育家として、山東省の郷村建設の指導を行った。また、日本の二宮尊徳を敬愛したことでも知られている」とある。

後者については周 偉嘉(1998)『中国革命と第三党』慶応大学出版会、章詒和(2007)『嵐を生きた中国知識人「右派」章伯鈞をめぐる人びと』集広舎などの本がある。現代政治にも関心を寄せていたことがわかる。ただ、この紙が「碑文関連」と一緒になっているのは、バラバラだったものがここに交じったものと思われる。

p.7 冒頭に「1314年河南安陽善応儲祥宮聖旨碑」とある。上記、杉山(1990:26)に、この碑文が載っていて、その碑文の研究として Haenisch(1940) *Steuergerechtheite der chinesischen Klöster unter der Mongolenherrschaft: Eine kulturgeschichtliche Untersuchung mit Beigabe dreier noch unveröffentlicher Phagspa-Inschriften* や Ligeti(1972) *Monuments en écriture 'Phags-Pa: Pièces de Chancellerie en Transcription Chinoise* の研究をあげている。インターネットで Haenisch(1940)のPDFが以下からダウンロードできる。

<http://www.battle-of-qurman.com.cn/literature/Haenisch-Berichte-1940.pdf>

それをみると、夏樹が記したものはこの Haenisch(1940:59)の Tafel 2 と同じ碑文である。しかし、ヘーニッシュの転写とはことなっている。たとえば、夏樹ノート p.8 第1行目「9. j̄in-gis qa-nu」一方のヘーニッシュは「j̄in-gis han u」である。夏樹独自のものなのか、あるいはほかに引用元があるのか、筆者にはこれ以上のことはわからない。パスパ文字を読む研究者によって検証されることを望む。以下が栗林さんからのコメントである。

中国の研究者照那斯図氏によれば、1314年の Buyantu Khan 聖旨碑には4種類あり、それぞれの

所在地は次の通り。

(1)河北省元氏--杉山 (1990) 論文

(2)河南省安陽

(3)陝西省周至

(4)陝西省周至--Haenisch(1940)論文

夏樹先生のノートは(2)のもので、先行研究には Chavannes(1908 : T'oung Pao IX、図版 24)がある。元の碑文は全 26 行で、全行の音写と、単語ごとに対応してモンゴル文語のローマ字転写が書かれている。

- p.7--1~8 行
- p.8--9~14 行
- p.9--15~17 行
- p.10--18~20 行
- p.11--21~23 行
- p.12--24~26 行

以上が栗林さんのコメントである。

pp.7-12 栗林さんのご指摘にしたがうと、「河南安陽善応儲祥宮聖旨碑」の音写である。

pp.13-14 碑文の一覧表がある。それがフランス語なので、シャヴァンヌあるいは Bonaparte 1895 あたりか。

p.16 モンゴル諸方言やオスマンリ・トルコ語などが出てくるのでアルタイ語概説の草稿か。栗林さんからのコメントによると、

p.16 以降は、「蒙古語概説」の草稿、あるいは資料と思われます。

• p.16

(一.

§1 §2)

§3 現存の蒙古語方言

§4 蒙古語の歴史

二. 文字、資料

三. 音韻

• pp.17~18

(三. 音韻 の続き)

四. 語法

名詞

出動名詞

• p.19

指示代名詞

• p.20

代名詞 (標題のみ)、白紙

・ pp.21~22

数詞

以上が栗林さんのコメントである。基本的に、栗林さんのご指摘に加えることはないが、いくつかの文献についてネットで調べた情報をあげておく。

p.17 にはペリオの論文への言及がある。

Paul Pelliot (1925) "Les mots à h initiale, aujourd'hui amuie, dans le Mongol des XIIIe et XIVe siècles" *Journal Asiatique*

この論文は以下からダウンロードできる。

https://altaica.ru/LIBRARY/Pelliot/Pelliot_Les%20mots%20mongols%20a%20h-%20initial%201925.pdf

ただし、その論文で論じられている音韻対応はここでの音韻対応とは関係がないようにみえる。

p.21 数詞の対応語彙について、C.G.E.Mannerheim (1911) *A visit to the Saro and Shera Yögurs* から数詞を引用している。この本は以下のサイトからダウンロードできる。

https://histdoc.net/pdf/Mannerheim_1911.pdf

この本の巻末に「LIST OF YÖGUR WORDS」があり、Mannerheim(1911:61-62)に掲載されているのが数詞である。この本の形式をそのまま写している。その下に女真語(引用元がない)の数詞が掲載されている。

p.22 冒頭に「数詞 日本語 十一谷 iso gai」とある。その次には泉井久之助(1939)「突厥語における数詞の組織について」『言語研究』(ダウンロード可能)が記載されているが、その下には「Shera Yögurs santa de Taoho san tch'ouam širongol (Potanin) golong」の諸言語の数詞があげられている。これらの数詞は泉井(1939)を直接引用していない。ただし、泉井(1939:58)には上記の Mannerheim (1911) や G. N. POTANIN, *Tangucko-Tibeckaja okraina Kitajai Central'naja Mongolia. I-II.Skt-Pb.1893:II,436-37* の文献が紹介されている。

ここにあげられている諸方言のうち、栗林均編(1986)『東郷語詞彙』によると、「santa de Taoho (導河の回教徒)」はドゥンシャン(東郷)語を表す。また、栗林編(1986:viii)によると、「san tch'ouam」と「širongol」はロシアの探検家ポターニンが 1893 年に記録したもので、前者はモンゴル(土族)語民和方言を、後者はシラ・ユグル(東部裕固語)をそれぞれ指す。最後の「golong」についてはわからなかった。

p.23 ブリアートとダグールの格語尾についての対応表がある。その下と p.24 は薄く書かれたものに×が付けられている。「物主格」などが読めるので、格の説明か。

p.25 左端に「II 45.b」などが並んでいて、華夷訳語の表示かと調べてみても、華夷訳語ではない。最初の uqa-bi で検索すると、元朝秘史の二卷四五に出てくるので、元朝秘史である。栗林均編(2001)を引くと、「bol-bi 孛勒畢, 做了(01:14:06, § 22)」とあるので、夏樹の記述と一致する。ここは元朝秘史のモンゴル語ローマ字表記と漢字音訳が書かれている。栗林さんによると、「II 45.b」は『元朝秘史』第2卷45葉(丁)裏(b)。aは表01~05行、bは裏06~10行を示す。

p.26 冒頭に「I 37a」とあるから、ここも『元朝秘史』で、第1卷37葉表(a)を示す。pp.25~26に書き出された『元朝秘史』のモンゴル語がどんな意味を持つのかはわからない。

p.27 モンゴル語の使役、受け身など。

p.28 「形容詞から伝る形容詞」と記されているが、その意味するところはわからない。

p.29 チュルク(tü),モンゴル(mo)ツングース(tung)の音韻対応一覧表。この一覧表に日本語が含まれている。たとえば「tü. qati mo. qatayu tung, kata jap. kata-ki」この当時は日本語アルタイ語族説でいけると考えていたのであろう。

p.30 「動詞から作る形容詞」とあり、p.28 と対応している。どちらにも小沢とあるので、小沢重男のことか。鉛筆書きで、後から書かれたものかもしれない。

p.31 ここに掲載されたものは N. Poppe, *Das mongolische Sprachmaterial einer Leidener Handschrift. Erster Abschnitt*, Bulletin de l'Académie des Sciences de l'URSS. VI série, 1927,に出ってくる語彙である。この Poppe (1927)は以下のサイトから手に入れることができる。

<https://altaica.ru/LIBRARY/POPPE/poppeleiden.pdf>

「k'ölgeni (KI₂), böhed (KI₃)」から「ünen (KII₇), hüreyin (KII₇)」までは Poppe (1927:1013)からの引用で、「(KI₂),(KI₃)」などは Bonaparte (1895)の番号である。この対応語として、オイラート方言(oir.)も Poppe (1927:1013)からの引用である。「hu j aḥur (KI₁)」から「deḥeve (KI₁)」までは Poppe (1927:1017)からの引用。「übulun (D₁₇)」は Poppe (1927:1025)からの引用で、この D は Dharmapāla の碑文で、父のこのノート 1 頁にも出てくる碑文である。Poppe(1927)をそのまま引用するのではなく、バラバラの箇所を引用しているのは、碑文に出てくる形式だけを Poppe(1927)から引用したことがわかる。モンゴル語を知らない筆者にはこれぐらいが精いっぱいである。

pp.33~42 基本的に、モンゴル諸語とチュルク諸語の対応語である。ところどころに、ヤクート語や満洲語が散見される。p.33~34 には祖語形と思われる-*γ-, -*β-, -*η-の対応語について書かれている。pp.35-36 には祖語形はなく、語彙の対応を集めている。pp.37-38 には『元朝秘史』の語形が散見される。つまり、古い語形をあげて対応語を探っているのであろう。pp.39-40 も同様にモンゴル語とチュルク語の比較語彙であるが、満洲語への言及もみられる。p.41 もモンゴル語とチュルク語の比較語彙である。p.42 には冒頭に「蒙古語には接尾辞が付く」とあり、蒙古語だけの特徴をあげている。

pp.43-44 三語だけの例が挙げられているが、モンゴル語の動詞パラダイムか。

p.45 守屋長、荻原正三共著『蒙古語文法書』昭和 22 年 10 月。天理語学専門学校蒙古語部発行とだけが記されている。

以上、栗林東北大学名誉教授のコメントを含めた解題である。

3. 0313 モンゴル語諸方言関連.

全 32 頁。表紙あり。ただし題名はない。非常に雑多なトピック。出てくる文献がすべて戦前の論文なので、これも戦前のノートだと思われる。

p.1 ロシア語で書かれている部分と下半分は Underwood (1924) *An introduction to the Korean spoken language* の書名があり、そこから抜き出したと思われる、'I am doing that', 'I will do that', 'I did that' の違いをハングルで記している。この Underwood の初版(1890)は Google サイトからダウンロードできる。

p.2 「上掲の字母表記は Klaproth über Sprache Uiguren の Uigurisch-Mongolisch Alphabet に依ったもの」とある。正式には Klaproth (1812) *Abhandlung über die Sprache und Schrift der Uiguren* を指す。この本は Google サイトからダウンロードできる。「Uigurisch-Mongolisch Alphabet」とあるが、Klaproth の 53 頁の前に「Vergleichung des Uigrischen und Sabäische Alphabet」の部

分である。なお、栗林さんからは「モンゴル字字母表」であるのご指摘を受けた。

p.3 3行目に20.と記載されて、24.の番号が記載されているが、たぶん『元朝秘史』の転写であろう。途中からの記載なので、1頁分脱落しているものと思われる。栗林均・确精扎布編(2001)『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引による転写とはだいぶ異なるが、qurban「三」という語彙が§20にもある。しかし、その前後はかなりことなる。栗林さんからは「パスパ字モンゴル語ローマ字転写と和訳。ボヤント汗碑文(1314)の第19行半ばから24行までと思われる」とのご指摘があった。

p.4 元朝秘史からの抜き書きである。一番左に「蒙客騰格理 蔑(竹冠) 迭禿該」とあり、この下にVI 12aとあるが、これを栗林均・确精扎布編(2001)で検索すると第6巻172に見つかる(269頁)。ただし、元朝秘史には「元秘史六 十二」とある。その右の列の最後にはVI 25bとあるが、栗林均・确精扎布編(2001:283)の第6巻177に同様の文言が見つかる。原文は「二十五」とあるので、父の数字は原文に依ったものなのだろう。栗林さんによると、VI 12aは「第6巻12葉表」を指す。また、この元朝秘史には日本語訳が掲載されているが、これは「那珂通世『成吉思汗実録』によるもので、その下にはこの『成吉思汗実録』の頁番号が記されている」とのこと。

なお、夏樹の「上代日本語とアルタイ語」(1941年)のなかに、『元朝秘史』の開巻第一頁を記し、これを逐語訳する」とあるので、学生時代に元朝秘史を学んでいたことはまちがいない。

p.5 も元朝秘史からの抜き出したもので、栗林さんによると「人称代名詞三人称の単数と複数」をあげている。

p.6 栗林さんによると「人称代名詞一人称の単数形と複数形」が元朝秘史からあげられている。

p.7 栗林さんによると「人称代名詞二人称の単数と複数」が同じく元朝秘史からあげられている。

p.8 夏樹の草稿。栗林さんによると「オイラート文語(トド文字)の創設について」述べている。

p.10=p.12 夏樹の草稿。内容は「蒙古文字の由来について」である。

p.10とp.11の間にノートの本があったが、半分以上切れてしまって読めない。

p.11=p.13「遼陵石刻集録」と書かれており、国立奉天図書館 編(1934)を指す(国会図書館ライブラリーでダウンロードができる)。ここに抜き出しているは契丹文字の数字とその形式。最近の武内康則(2017)「契丹語の数詞について」をみると、その形式はかなりことなる。契丹語研究の進展のためなのだろう。

pp.14-15 契丹文字の十干十二支についてである。

pp.16-17 契丹の年号と西暦の対応関係を一覧表にしている。

pp.18-19 橋本進吉『文禄元年天草版吉利支丹教義の研究』(1928年東洋文庫か)からのメモ書き。この本もGoogleサイトからダウンロードできる。

pp.20-21 服部四郎「蒙古語の口語と文語」(1941年『蒙古学報』第2号134-191)からのメモ書き。この論文は『服部四郎論文集(第1巻)アルタイ諸言語の研究1』に収録されている。また、国会図書館デジタルコレクションにも『蒙古学報』はあり、個人登録をすれば読めるようになっている。

p.22 『Sino-Iranica』Berthold Lauferからのメモ書き。以下のサイトからダウンロードできる。

<https://openlibrary.org/books/OL7045402M/Sino-Iranica>

p.23 こちらもp.22からの続きのようにみえるが、黒島、沖縄の国頭郡名護町などが記されていて、沖縄の語形とMo.(モンゴル語をあらわすようにみえる)の比較がされている。ただし、印刷がうすいためか、語形がよく判別できない。

p.24 一番上に「小幡重一」と記されている。この人の名前は全く知らなかったが、調べてみると面白い。

まず、ウィキペディアを引用すると、「小幡 重一（おばた じゅういち、1888年4月24日 - 1947年9月15日）は、物理学者。東京市京橋区（現中央区）出身。1910年東京帝国大学理学部物理学科卒業。逓信省電気試験所に入る。1920年理学博士。1921年東京帝大に新設された航空研究所の教授となる。1936年石本巳四雄、颯田琴次、田口三郎と日本音響学会を設立。航空機によって生ずる音の測定・分析、日本語の音声や三味線の音色なども研究した」とある。

この人がなぜ夏樹のノートに登場するのか。じつは、この小幡重一は今でいうところの実験音声学の先駆者で、以下のような論文がある。言語学史的には全く知られていない。

小幡・豊島(1932)「日本語母音及び子音の性質」『日本数学物理学会誌』 6(1):11-36

小幡・豊島(1932)「朝鮮語母音及び子音の性質」『日本数学物理学会誌』 6(4):379-403

小幡・豊島(1935)「蒙古語の物理音聲學的研究」『日本数学物理学会誌』 9(1):1-17

小幡・豊島・雨宮(1935)「トルコ語の物理音聲學的研究」『日本数学物理学会誌』 9(8):322-334

夏樹がノートしたものは、小幡・雨宮(1936)「東北方言の物理音聲學的研究」『日本数学物理学会誌』 10(3) 195-219 である。この論文をみてびっくりしたのは方言話者のインフォーマントである。仙台方言が小倉進平、盛岡方言が金田一京助、山形方言が横山辰治と言語学科の教員と大学院生が参加している。夏樹の引用した「土」は208頁に掲載されている。それを切り取って下に掲載しておく。

へは僅に鼻音なる事を示す。

| | |
|-----|------------------------------|
| 〔土〕 | 青 (31 / 40) tsîdzî |
| | 仙 (10) tsûdzî |
| | 山 (30) tsütndzû |
| | 盛 (11) tsûdzû ⁽¹⁾ |

父が残したノートを丁寧にみると、思わぬ発見がある。実験音声学者と言語学者の交流の一端を知ることができるとは思ってもみなかった。

p.25 宮良当壮「青森・秋田両県方言に於ける P 音の研究」(1940年『安藤教授還暦祝賀記念論文集』掲載)のメモ書きである。この論文も個人登録すれば、国会図書館デジタルコレクションで読むことができる。一番最初に、「hana < Fana < pana」があげられているが、古い古音 p を東北方言に求めたものである。

p.26 前間恭作『韓語通』(1909年)からのメモ書き。この本も国会図書館デジタルコレクションからダウンロードできる。

p.27 日本語助詞「が、を、の、も、と、に、は」との対応語を朝鮮語に求めている。

p.28 冒頭に『高昌館来文』とある。『華夷訳語』の一つ『高昌館訳語』には「雑文」と呼ばれる語彙の部と「来文」と呼ばれる例文がある。『高昌館来文』は以下からダウンロードできる。

<https://ia800306.us.archive.org/9/items/02076763.cn/02076763.cn.pdf>

それを見ると、夏樹がノートに書き出しているのはこの冒頭の部分である。

pp.30-31 契丹文字に関連する文献『遼史本記』や『遼史拾遺』の記述をメモしたか。

p.32 ウイグル語の単語か。日本語訳とドイツ語訳が記されている。

4. 0315 ロシア語文献関連。

全9頁。ただし、偶数頁にはなにも書かれていないので、実質は5頁。

表紙に、以下のロシア語文献の表題がある。

Dragunov, Aleksandr A. Исследования по грамматике современного китайского языка, т. 1, М.—Л., 1952. [Studies on the grammar of modern Chinese language, so 1, Moscow-Leningrad, 1952]

ドラグノフについては、Encyclopedia of Chinese language and linguistics には以下のようにある。

Dragunov, A.A. [Александр Александрович Драгунов] (1900–1955)

Aleksandr Aleksandrovič Dragunov (also known as Dragunoff, Chinese name Lóng Gu ō fū 龍果夫) was a prominent Soviet Sinologist and linguist. He is mainly known for his studies in historical phonology in the West and for his works on various aspects of Chinese linguistics in Russia and China.

p.1 §1 「Nege rhen shǐ gungrhen」とあり、その下には「那人是工人」と漢字で記され、その下にはロシア語で意味が書かれている。ドラグノフの本に書かれたとおりに写しているのであろう。

p.3 §2のa)、b)と、§3の例文が掲載されている。

p.5 §3の続きと§4の例文がある。例文は「他是中國人」とか、「他說的 是 中國話」とか、初歩の中国語が並んでいる。

p.7 §5では「甘肅、陝西」や「湖北、河西」などが出てくるので、方言について述べているのであろう。

p.9 白話と甘肅方言の違いを例を挙げて述べている。

なお、この本のPDFは見つけられなかったため、その内容と父のノートを比べることができていない。

5. 0316 エスペラント学習関連。50. 準接頭語 (エスペラント) .

全26頁。表題なし。50. 準接頭語(エスペラント)の二つがエスペラント関係のノートである。この二つのノートについては藤原敬介帝京科学大学准教授が解題を書いてくださった。謝意を表するとともに、以下に掲載する。ただし、もとのPDFには頁数がなかったため、頁数を施したものに合わせて、長田が修正している。

長田夏樹ノート解題・エスペラント

1. 長田夏樹ノートのうちエスペラントに関係するものは#5 と#50 である。
2. 内容から判断して、#50 に後続するのが#5 である。おそらく、この二つは本来はおなじノートであった。
3. 以下、#50 のノートのPDF で p.1 は#50-1、p.2 は#50-2、#5 のノートのPDF で p.1 は#5-1、

p.2 は#5-2 などとして言及する。

4. ノートの表紙には「準接頭語」という表題がついている。「準接頭語」という用語は、千布利雄. 1921. 『改版エスペラント全程』(日本エスペラント社) の 107 頁から 108 頁にかけて掲載される一連の語に対する表題である。ただし、長田ノートにあがる「準接頭語」の内容は、千布 (1921) とはかならずしも一致しない。

5. #50-1 に、参考文献が略記されている。

「岡本好次 獨習エスペラント p.72～」とあるのは、岡本好次・板橋鴻. 1931. 『獨修エスペラント』(岡崎屋書店) のことである。

つづいて「新撰エス和」とあるのは、岡本好次. 1926. 『新撰エス和辞典』(日本エスペラント學會) のことである。そして、長田ノートにおける「準接頭語」としてあげられる一連の語は、岡本 (1926) の巻末に「エスペラント語法概観」としてまとめられた部分で「準接頭字」としてあがる語 (pp.14-15) と一致する。

「千布利雄 エスペラント全程 p.107～」とあるのは、千布利雄. 1921. 『改版エスペラント全程』(日本エスペラント社) のことである。1922 年にでた『改訂増補エスペラント全程』でもおなじである。なお「改版」がつかない『エスペラント全程』は 1914 年に初版がでている。しかし「準接頭語」は掲載されていない。

6. #50-2_#50-15 は、岡本 (1926: 14) の「準接頭字」のうち、‘al’ から‘de’ までである。#50-2, 4, 6, 8, 10, 12, 14 に「準接頭字」ではない用法としての語が、#50-3, 5, 7, 9, 11, 13, 15 に「準接頭字」としての語があがっている。ほとんどのばあい、岡本 (1926) にあがる見出し語のみがあがっている。

7. #5-1_#5-47 は、岡本 (1926: 14-15) の「準接頭字」のうち、‘duon-’ から‘trans-’までである。偶数頁に「準接頭字」ではない用法としての語が、奇数頁に「準接頭字」としての語があがっている。ほとんどのばあい、岡本 (1926) にあがる見出し語のみがあがっている。

8. #5-4 には‘Millidge’ と「岡本」からの引用がある。‘Millidge’ とは、Edward A. Millidge. 1924. *The Esperanto-English dictionary*. (The Esperanto Publishing Company Ltd., Rickmansworth, Herts, England) のことである。そして Millidge (1924: 89) にあがる見出し語‘el’ からの抜粋がある。また「岡本」として岡本・板橋 (1931: 73) から‘el’ の部分が抜粋されている。

9. #5-7 には‘endormi^gis’ という語例とともに‘86/13’ という数字がみられる。この数字が何を意味しているかは不明である。なお、類似した数字は#5-11 に‘88/13’、#5-35 に‘86/10’、#5-50 に‘86/6’ がある。いずれも意味は不明である。

10. #5-10 には岡本・板橋 (1931: 73) から‘for-’ の語例が引用されている。千布 (1921) から引用がある。さらに小坂狷二. 1932. 『イソップ物語』(日本エスペラント學會) からの引用がある。引用される語例は小坂 (1932: 26) にみられる例である。

11. #5-12 には、E. L. Thorndike. 1941. *Thorndike century senior dictionary*. (Tokyo: Maruzen) から‘inter’ の部分の引用 (Thorndike 1941: 489) がある。また、岩崎民平編. 1941. 『簡約英和辞典』(研究社) から‘inter’ の部分の引用 (岩崎編 1941:764) がある。

12. #5-49 には岡本 (1926: 14-15) に「準接頭字」としてあがる一連の語を、「前置詞」、「副詞的助辞」、「名詞」、「代名詞」、「感嘆詞 (間投詞)」、「接頭語」と再分類している。

13. #5-50 には、接頭辞‘preter-’をもつ語が 8 語あがっている。

14. なお、エスペラント資料については日本エスペラント会館で臼井裕之氏に、Thorndike (1941)

および岩崎編(1941)については早稲田大学の西田文信氏にご協力いただき、閲覧することができた。ここにお礼もうしあげる。

以上、藤原准教授による解題である。

6. 0320 ロシア語キルギス語辞典関連。

全 79 頁。表紙の表題には以下のロシア語の文献が書かれている。

kratkij russko-kyrgyzskii dorozhnikšč so slovaremšč, A. E. Alektorova 1911

この本自体をネットで発見することができなかったが、以下の本の縮刷版ではないだろうか。

Алекторов А.Е. Киргизская хрестоматия с русско-киргизским словарем. Публикация 1907 года

ノートブックには奇数頁に 3 欄があり、最初の欄にロシア語、次にキルギス語が記されている。偶数頁にも 4 欄あり、ロシア語で何を示すか書かれているが、ロシア語が読めない私には判読不明。ただし、こちらの欄はほとんど埋まっていない。

7. 0323 カレン語分類関連. わら半紙 1 枚

カレン語の専門家である加藤昌彦慶応大学教授にこれをみていただいたところ、以下のような解題を送っていただいた。以下に掲載する。

「0323 カレン語分類関連」解題

カレン系民族には数十種類の民族が知られ、それらの言語系統的分類はいまだに定まっていない。ミャンマーの民間分類では、カレン族に、ポー・カレン(Pwo Karen)、スゴー・カレン(Sgaw Karen)、ボエー・カレン(Bwe karen)の 3 種があるとされる。ポー・カレンとスゴー・カレンは主に平地に多く住むカレン系 2 大民族である。一方、ボエー・カレンというのは本来は山地カレンの 1 民族を指す呼称であるが、山地カレン諸民族の総称としても使われる。この 3 種族名のラテン文字による表記は、Pwo、Sgaw、Bwe とするのが現在最も一般的である。しかし他にも様々な表記があり、ポーには Pwo 以外に Pgho、Pho、Poe、Po など、スゴーには Sgaw 以外に Sgau、S'gaw など、ボエーには Bwe 以外に Bghai、Bghe などがある。ビルマ語でタウンドゥー(「山の民」の意)とも呼ばれるパオ族はカレン系民族の 1 種であるが、文化的にシャン族の強い影響を受けているため、ミャンマーではカレン族とは別扱いされることが多い。パオのラテン文字表記には、Pao、Pa-O、PaO、Taungthu、Toungthu などがある。

長田夏樹のメモには、ポー・カレン、スゴー・カレン、ボエー・カレン、パオの 4 民族名がラテン文字でそれぞれ、Pwo、Sgaw、Bghai、Taungthu と綴られている。4 民族ともこの表記で言及している文献として、Arnold Wright の Twentieth Century Impressions of Burma: Its History, People, Commerce, Industries, and Resources (1910 年)がある。そのため、長田はこの文献を参照した可能性が高い。プオー、スガウ、ブガイ、タウントゥという表記は、長田自身が Wright のラテン文字表記を日本語表記に変換したものと思われる。

しかし、他のメモについては情報源が特定できないことが多い。長田夏樹はポー・カレンの居住地として、(1)北シャン、南シャン、マンダレー、サガイン、マグエ、(2)イラワジ、トンゲー、(3)テナ

セリムを挙げ、スゴー・カレンの居住地として、(1)北シャン、南シャン、カレン・ニ、サガイン、メチラ、マグエ、(2)アラカン、(3)テナセリムを挙げている。奇妙なのは、北シャン、南シャン、マンダレー、サガイン、マグエは、植民地時代以降の移住者を除けばポー・カレンがほとんど住んでいない地域だという事実である。同様に、北シャン、サガイン、メチラ、マグエ、アラカンは、スゴー・カレンの元来の居住地ではない。こうした元来の居住地と異なる土地は Wright の著書にカレン系民族の居住地として記載されていないため、おそらく地名についてのメモは他の情報源に依拠したのだろう。英植民地期の人口統計には新しい時代の移住者も統計に上がってくる可能性があるため、そのようなものを参考にしたことも考えられる。例えば、英植民地政府による Linguistic Survey of Burma (1917 年)には民族ごとの人口に関する各地域の詳細な情報が記載されている。しかし、この資料において、長田夏樹がメチラと記したメイティーラ(Meiktila)の人口統計にカレン族の記載がないため、長田がこの統計を参照したとは考えにくい。現時点(2022 年 7 月)で、これら地名についての情報源が何であったかは不明である。

また、長田夏樹は「3 ブガイ」の項目に、(1)Zayein、(2)Banka、(3)Loilong、(4)Bre (≠Bwe)、(5)Padaung とメモしている。このうち、Zayein、Bre、Padaung はカレン系山地民族の名であり(Padaung は首長族として知られる)、Loilong は南シャン州の地名である。したがって、民族名と地名が混在している。Banka は何を指しているか不明である。Bre と Bwe は意味的に等価でないため、「(≠Bwe)」という注釈は正しい。このメモについても、情報源が何であったかは現時点で不明である。

以上が、加藤教授の解題である。

8. 0325 オルコン碑文関連。

全 11 頁。表紙なし。ただし、p.12 はわら半紙でこのノートに挟まれていたものである。

p.1 「保義可汗 九姓廻鶻愛登里囉汨沒蜜施合毗伽可汗聖文神武碑」とある。ウィキペディアによると、「保義可汗(ほぎかがん、拼音: Bǎoyì Kěhàn、?-821 年)は、回鶻可汗国の第 9 代可汗。名は不明。可汗号はアイ・テングリデ・クト・ボルミシュ・アルプ・ビルゲ・カガン(Ay täŋridä qut bolmiş alp bilgä qayan)で、唐より保義可汗の称号(美称)を加えられた」とある。この碑については羽田亨「九姓廻鶻愛登里囉汨沒蜜施合毗伽可汗聖文神武碑考」(『羽田博士史学論文集 上巻歴史篇』所収。1957 年)がある。この論文集は国立情報学研究所・デジタル・シルクロード・プロジェクト『東洋文庫所蔵』貴重書デジタルアーカイブで読むことができる。

p.2 冒頭に「オルコン碑文」とあり、その欄外に「Daniel Gottlieb Messerschmidt Jenissei」とあり、左上には「1719-1727」と年号が記されている。

「オルコン碑文」は現在オルホン碑文と呼ばれている。日本大百科全書の護雅夫によると、以下のように記載されている。

外モンゴルのオルホン Orkhon 川流域で発見された古代トルコ語碑文。復興期の東突厥(とっけつ)(突厥第二帝国)のビルゲ・ハガンと、その弟キョル・テギンとの紀功碑で、それぞれ 735 年、732 年(ともに没後)に建てられた。このほか、この 2 人を助けた重臣トニユククがその生存中に建てた自分の紀功碑がトーラ川流域で発見され、また同様な古代トルコ語碑文がオンギン川流域そのほかから発見されているが、これらもオルホン碑文と総称される。いずれも突厥文字で記され、1893 年にデ

ンマークのトムセンが解読の鍵(かぎ)をみつけた。古代トルコ人が初めて自らの文字で記した碑文で、歴史学、言語学の研究に重要な資料である。[護 雅夫]

欄外の記述については、ウィキペディアによると、「Daniel Gottlieb Messerschmidt (Russian: Даниэль Готлиб Мессершмидт; September 16, 1685 – March 25, 1735) was a German physician, naturalist and geographer and among the first to conduct a scientific exploration of Siberia, which led to the unearthing of the first fossil mammoth.」とある。また、「Messerschmidt set out from Moscow on September 5, 1719 through Nizhny Novogorod, Khlynov, Solikamsk, Turinsk, Tyumen, Tobolsk, Tomsk, Kuznetsk, Abakan, Krasnoyarsk, Achinsk, the Sayan Mountains, Mangazeya, the Lower Tunguska, Irkutsk, Nerchinsky Zavod and back.(中略) The journey, however, exhausted him, and he returned to Saint Petersburg in February 1728.」とあるので、父が欄外に書いた「1719-1727」は Messerschmidt がシベリアを探検していた期間を表す。

Julian Rentzsch & Hülya Yıldız (2020) *The Uybat Inscriptions: A Group of Old Turkic Runic Texts from the Yenisei Area* によると、「The discovery of the longest of the Uybat Inscriptions, Uy-bat III (= E-32), in the year 1721 by the German natural historian Daniel Gottlieb Messerschmidt (1685-1735) simultaneously marks the beginning of concrete knowledge about the Yenisei Inscriptions in Europe.」とある。

これらオルホン碑文の発見の歴史が書かれているが、その引用元の論文はない。白鳥庫吉「突厥闕特勤碑銘考」があげられているが、ネットにはないので未見。

p.3 冒頭に、「šine-usu 碑文」があげられている。それに続いて、G.J. Ramstedt の *Zwei uigurische Runeninschriften in der Nord-Mongolei, aufgefunden und mit Transskription, Uebersetzung und Bemerkungen* があげられている。このラムステッドの論文は *Suomalais-Ugrilaisen Seuran Aikakauskirja 30* に掲載された論文である。こちらは以下からダウンロードができる。

<https://ia902806.us.archive.org/17/items/aikakauskirjav30/aikakauskirjav30.pdf>

この論文によると、最初が「Die Inschrift der Grabsteins am Sudži」(pp.3-9)で後半が「Die Inschrift der Grabsteins am Šine-usu」(pp.10-37)である。父がここに記載しているのは前半の Sudži の碑文であって、šine-usu 碑文ではない。ここに引用しているのは、Ramstedt(1914:5)に載った 1.~5.碑文の転写を写したもので、いくつかの単語に日本語訳をつけている。

p.4 も碑文の転写と和訳であるが、うへの Ramstedt(1914)からの引用ではない。シネ・ウス碑文については森安孝夫他(2009)「シネウス碑文訳注」『内陸アジア言語の研究』があるが、夏樹がここに記している碑文の転写と日本語訳が同じものはない。素人の筆者には、出典はわからなかった。

p.5 オルホン碑文、エニセイ碑文のある具体的な場所が書かれているが、その引用元として MPM とある。残念ながら、それが何を指すかわからない。この辺の碑文については RADLOFF, W. (1895). *Die Alttürkischen Inschriften der Mongolei* があるが、この本をダウンロードしてみると、父が Ikhe-Askhete や Khoito-Tamir と記している碑文は Iche-As'chete や Choito-Tamir と綴るなどの相違点がある。

pp.6-7 柴田武「オルホン碑文の発見と研究」からのメモ書きである。柴田論文に掲載された参考文献を書き留めたものである。この柴田論文は『東洋学報』第 31 卷(1947 年)に掲載されたもので、インターネットからダウンロードできる。

p.8 Franz Babinger(1915)Eine neuentdeckte ungarische Kerbinschrift aus Konstantinopel vom Jahre 1519 と記されているが、原文をみると最後は「Jahre 1515」となっているので、写し間違いであろう。この論文が掲載されている Ungarische Rundschau für historische und soziale Wissenschaften 3, 1914 は以下からダウンロードできる。

<https://core.ac.uk/download/pdf/35136941.pdf>

この雑誌の pp.41-52 に Babinger の論文は掲載されている。

p.9 ノートに挟んであった紙で、モンゴル王朝の系譜が書いてある。

9. 0326 元王朝

わら半紙一枚。8、の p.9 と同様のもの。

10. 0327 モンゴル帝国王位系図関連

わら半紙二枚。8.9. との関係はわからない。

11. 0332 モンゴル語史草稿関連。

全 68 頁。但しノートの部分は p.62 まで。表紙はないが裏表紙はある。

p.1 「Louis Hambis 'Grammaire de la langue mongole écrite' Paris 1945」とあるが、タイトルだけで後は白紙。この本は以下からダウンロードできる。

https://altaica.ru/LIBRARY/hambis/hambis_grammaire.pdf

pp3-36 は夏樹の草稿。姉に調べていただいたところ、発表論文は以下である。

pp3-14 「Mongolo-Turcica—アルタイ比較言語学序説」(単著), 『Azia Gengo Kenkyu』第 1 号:59-80 頁, 1952 年 12 月; 『追悼集』23-44 頁。

pp.15-「十二世紀に於ける蒙古諸部族の言語—Mongolo-Turcica II」(単著), 『東方学』第 5 号, 42-55 頁, 1952 年 12 月; 『論述集(下)』154-171 頁。

この草稿の pp20-24 に「1276 年龍門神禹廟聖旨碑」の転写が掲載されている。これはポッペ (Н.Поппе 'Квадратная письменность'1941) の p.59 に掲載されたものである。ただし、父の転写はポッペのものと若干異なるが、栗林さんが「1. 0303 モンゴル語関連」の解題の中でコメントしているのでここでは繰り返さない。なお、pp67-68 に、パスパ文字とその転写が掲載されているが、それが「1276 年龍門神禹廟聖旨碑」にあたる。

また、このポッペの本(ロシア語原文)は以下にアップされている。

<https://altaica.ru/LIBRARY/POPPE/quadrat1.pdf>

また、この本はエヌ・エヌ・ポッペ著、村山七郎・山崎忠共訳「方形字」『日本文化』35:1-50 に邦訳されている。しかし、父が引用したテキストの部分は訳されていない。さらに、亦隣真・加藤雄三訳(2001)「1276 年龍門禹王廟パスパ字令旨碑を読む：ニコラス・ポッペ訳註の書評を兼ねて」『内陸アジア言語の研究』16:133-154 にポッペの本の書評があり、痛烈にポッペの批判がなされている。この論文には父が引用したテキストも掲載されている。

pp38-50 北方諸民族の中国語文献での呼び名や出典が書かれている。

- p.38 蒙古民族が新旧唐書や金史でどう呼ばれているかが書かれている。
- p.39 契丹や柔然がどの文字を使用し、現在どの方言を話しているかがリストアップされている。
- pp.40-41 丁零が史記匈奴伝や漢書李陵伝などで、どのように記載されているかが抜き書きされている。なお、丁零については、以下にコトバンクの説明を引いておく。

紀元前3世紀～後5世紀にモンゴル高原に遊牧していたトルコ(チュルク)系民族。丁令、丁靈とも書かれる。これらは「車輪」を示す古代チュルク語 *tegräk* の音写であるという説もあるが、チュルクを写したものであろう。匈奴(きょうど)の支配を受けたが、のち独立してこれを攻めた。三国～南北朝時代には、一部が中国北辺、西北辺に散居したが、主力はモンゴル高原に残って中国人から高車丁零、高車とよばれ、柔然(じゅうぜん)に征服された。鉄勒(てつろく)はその後裔(こうえい)である。
[護 雅夫]

p.42 匈奴について、史記匈奴伝や漢書匈奴伝でどのように書かれているかを抜き書きしている。

pp.44-46 葷粥について、後漢書南匈奴伝や史記などでどう記載されているか引用している。なお、コトバンクには、葷粥について「中国、古代に北西辺に住んでいた部族。『史記』では匈奴の祖としている」とある。

pp.48-50 獫狁が文献でどのようにあられるか、引用例をあげている。なお、ウィキペディアによると、「獫允(けんいん)は、中国の北方と西北方に位置した古代の民族。また獫允、獫狁、獫狁などと呼称される」とある。

p.50 「[顔注]小雅采薇之詩也」とだけあるが、「采薇」を含め獫狁については「**20. 0937 獫狁考**」の解題参照

p.52 「plough(鋤), bridle(馬勒(◇おもがい(headstall)・くつわ(bit)・手綱(reins)から成る))」のモンゴル諸方言(カルムック、ブリヤート、ハルハ、オルドスなど)の対応語を並べている。

pp.54-55 こちらもモンゴル諸方言の対応語について、「3, 4, 10, 灰、山、爪、指、冬、草」などの語彙を記している。ロシア語表記されたものや転写表記されたものもあるが、引用元は示されていない。

p.56 こちらには「指、冬、草」のモンゴル諸方言の対応が示されている。

p.58-59 「民和、互助、東郷、保安、達呼尔」各方言の数詞対応語をあげている。

p.60 冒頭に「達呼尔」とあるので、ダグール語についてのべている。続いて「方位、客体、従、造、共同、所有」とあるので、格変化か。

p.62 冒頭に「ratnah-śri 宝一吉祥」とある。何を写したかは不明。ここまででノートは終わっていて、後は挟まれていた紙切れ。

pp.63-65 『元朝秘史』の漢文とモンゴル文字か。「都児」に「裏」をあて、「迭兀」に「弟」をあてているが、これはモンゴル語音訳漢字の特徴を表している。

p.66 孔方焯「全辺略記」12巻、巖從簡「殊域周咨録」24巻などの中国語文献。その下には、金幼孜「北征録」「後北征録」、楊栄「北征記」などの中国語文献。その横には、和田博士「内蒙古諸部落の起源」(1917年。国会デジタルコレクション)、「土默特趙城の戦に就いて」(1918『東洋学報』8(2):285-293)「明末清初に於ける蒙古族の西征」(1921『東洋学報』11(2):267-275)、「兀良哈三

衛の本據について」(この論文と次の論文は『東亜史研究』1959年に収録)、「兀良哈三衛に関する研究」(1934『滿鮮地理歴史研究報告』12:137-312:13:261-498)、「正統九年の兀良哈征伐について」(1930『東洋学報』18(3):425-434)、「豊州天徳軍の位置について」(1931『史林』16-2:19-36)の7論文が記載されている。『東洋学報』は東洋文庫リポジトリより、また『史林』は京都大学学術情報リポジトリより、それぞれダウンロードが可能。

pp67-68 すでに述べたように「1276年龍門神禹廟聖旨碑」のパスパ文字とその転写。

12. 0333 諸言語雑記関連。

全35頁。ただし、p.33までがノートブックで、後は挟まれている紙である。表紙があるがタイトルはない。ロシア語の筆記体で長田夏樹の文字がある。

p.1 Genealogical table of the Alaungpaya Dynasty ビルマ王朝の系譜。何に基づいて、何の目的で書かれたのかは不明。

p.3 「薊国公張氏先塋碑」とあり、漢文とパスパ文字の碑文とその転写である。その碑文については吉池(2009)「東洋文庫所蔵の八思巴(パスパ)文字拓本」に以下のような説明がある。それと同一のものと思われる。

目録に拠ると2337(請求番号はII-16-C-6)には以下の記載がある。

・2337 張氏先塋碑(漢文, 蒙文, 八思巴文字蒙文)(元)元統3年1月=至元1年
碑陽: 皇元勅賜故贈榮祿大夫遼陽等処行中書省平章政事柱国追封薊国公張氏
先塋之碑/(元)尚師簡, 張起巖/文; (元)嚶嚶/書。39行行100字。1
枚; 316×128cm。

碑額: 大元勅賜故贈榮祿大夫遼陽等処行中書平章政事柱国追封薊国公張氏先塋
碑/(元)許師敬/書。4行行8字(篆書 陰刻)。1枚; 72×48cm。

碑陰: 蒙文37行。1枚; 316×128cm。

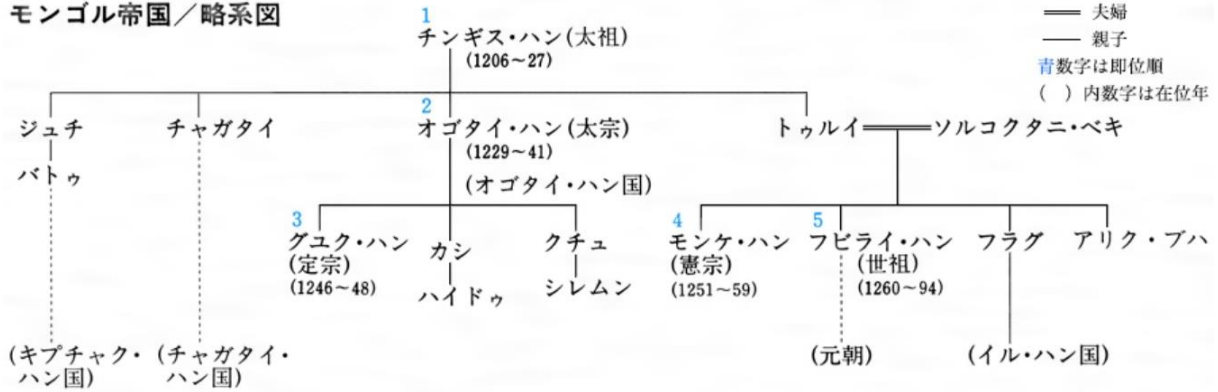
碑陰額: 八思巴文字蒙文4行。1枚 85×44cm。

目録は八思巴文字蒙文とするが八思巴文字漢語文に改める必要がある。目録に碑陰額の八思巴文字蒙文4行とあるものが八思巴文字漢語文である。これは『八思巴字與元代漢語』の附6. 張氏先塋碑(図版26)と同一。同書は、この八思巴文字漢語文を“大元勅賜故贈榮祿大夫遼陽等処行中書平章政事柱国追封薊国公張氏先塋碑”と読む。この読みは漢字篆書碑額の内容と同一ということになる。なおこの拓本には“財團法人東洋文庫 昭和十一年一月廿五日”という楕円の所蔵印がある。(吉池2009:16)

父は東洋文庫でこの拓本を見てノートに取ったのかもしれない。

pp.4-5 以下の系図を書いている。コトバンクからの引用。ノートの左端がコピー漏れしている。

モンゴル帝国／略系図



p.6 「qul 手 kōn 日 su 水 sot 乳 irtægæ 明日」が書かれている。Wiktionary を引くと、タタール語 qul 「手」が出てくる。また、チュルク語のうち、カザフ語のキリル文字の cy が「水」を意味し、ウイグル語 su も「水」する。いずれにせよ、チュルク語のどれかを写したものであろう。ただし、Klaploth のウイグル語の形式とは違うので、出典はわからない。

pp8-9 最初に「オスマントルコ」とあるので、オスマン帝国時代のトルコ語の語彙が記されているのであろう。Wiktionary をひくと、aq 「白」はタタール語と出てくるし、ウズベックの文字も見られるので、チュルク系の言語であろう。

p.10-11 1~31 までの同じ旁(覃)を含む漢字音が書かれている。その意図するところはわからない。

p.12 栗林さんによると、「最初に書かれているのがモンゴル語、次に満州語で、モンゴル語では çiy'ulultu qayaly-a 「聚会のある門」、満州語は imiyangga jase 「聚会のある辺境」の意味だが、これは張家口をさす」という。

p.13 は「部落」と「満洲名」が平仮名で表記されているが、地名についての考察か。

p.14 冒頭に「松花江 スンガリ(天河)」と書かれている。これは以下のウィキペディアによると、「満州語では松花江はスンガリ・ウラ (ᠰᠤᠩᠭᠠᠷᠢ ᠤᠯᠠ 転写: sunggari ula、松阿里烏喇) すなわち「天の川」と呼ばれており、この地に入ったロシア人もスンガリ(Сунгарь)と呼んだ。第二次世界大戦前の日本、殊に満州国時代の日本人の間でもスンガリ川の名で知られている」とあるので、ここに記されたのは満州語地名だと思われる。

p.15 一行目「u ju, u jui, u ju či, tuktan, emu čiči」二行目「jai 第二の、二番目の、次に」三行目「ilaci」とある。これらは満州語の「第一、第二、第三」である。その下には十二支のモンゴル語がある。夏樹ノート「1. モンゴル語関連」に出てきたものと同じである。栗林さんによると、このモンゴル語の十二支のところに、VII22a と出てくるが、これは「元朝秘史の第7巻22葉表の意味」だという。

p.16 「女真訳語」とあり、その隣欄には「回鶻語」とあるが、こちらは赤字で×が書かれている。内容は十二支である。その下にはキリル文字表記で十二支があるが、こちらも赤字で×が付けられている。

p.17 冒頭に、「a.女真館来文 b.女真訳語」とあり、女真語の数詞が書かれている。

p.18 「司訳院日満蒙語学書断簡」とある。これは国会図書館デジタルコレクションで、京都帝国大学文学部編(1918)としてダウンロードできる。集録文献は『改修捷解新語』など日本語関係以外に、『漢清文鑑』、『清語老乞大』があり、それらのうちどれかを父は写したのであろう。ハングルも満洲文字も読めないで、これ以上は触れない。栗林さんによると、『満語老乞大』の本文だ」という。

pp.19-22 この「司訳院日満蒙語学書断簡」に掲載された『満語老乞大』の本文からの抜き書きである。

p.25 一番上に「諺文の起源及び朝鮮語の特質 小倉進平 非売品 昭和 10 年 中央朝鮮協会」とある。これは大学の図書館には収まっていないようで、この小冊子が蔵書家で知られた徳永康元の蔵書に紛れていたことを金子亨がこう述べている。「これらの古典的著書に混じって、驚くべき分量の小冊子がある。例えば、文学博士小倉進平口述『諺文の起源及び朝鮮語の特質』中央朝鮮協会昭和 10 年非売品 31 頁、北方産業研究所『東部シベリア民族誌』(一) 昭和一九年(秘) 83 頁というような貴重なパンフレットの類が古新聞の束のなかに埋もれて残された」と報告している¹⁶。小倉進平の朝鮮語研究に詳しい福井玲東大教授にこのパンフレットのことをお聞きしたら、「お問い合わせのものは私も見たことはありません。小倉文庫にもないと思います」とのメールをいただいた。非常に珍しいものを父が読んでいたことがわかる。ただし、これが現在どこに行ったかは不明である¹⁷。

p.26 には古文が載っている。『新撰字鑑』や『和名抄』などを引いて、古語「ける」の歴史を探っているようだ。

pp.27-29 p.27 の一番上に「奈良朝文法史 山田孝雄」とある。p.27 では格助詞をあげている。また、pp.28-29 には代名詞をあげている。いずれも、日本語とアルタイ語の系統関係を探るためのものだと思う。なお、この本も国会図書館デジタルコレクションに入っている。

pp.30-33 冒頭に「清文啓蒙」とある。p.30 と p.32 には転写とその和訳、p.31 と p.33 には漢文が掲げられている。

これについては、竹越孝(2012)『兼滿漢語滿洲套話清文啓蒙：翻字・翻訳・索引』神戸市外国語大学研究叢書があり、夏樹がローマ字転写した部分は竹越(2012:7-8)にあたり、「序」の部分である。

p.34 と p.35 はノートに挟まれていた紙切れに書かれたものである。

p.34 は Wikitionary で引くと、チベット語である。以下に引用する。

བར་རྟེན

Tibetan

Pronunciation

Old Tibetan: /*brda.rɲiŋ/

Lhasa: /təl.ɲiŋl/

Noun

བར་རྟེན • (brda rnying)

(linguistics) archaic word; obsolete word

林範彦神戸市外大教授による、以下のようなコメントをいただいた。

さて、ご質問の件ですが、ご賢察の通り、チベット語です。

左上上部に綴字法とあり、

¹⁶ 金子亨「徳永先生の蔵書のこと」『古書通信』937号(2007年8月号) pp.8-10 で、以下のサイトにアップされている。

<http://www.ne.jp/asahi/kaneko-tohru/languages-nowar/newpage51.htm>

¹⁷ 2023年5月22日現在、この『諺文の起源及び朝鮮語の特質』をネットで検索したところ、国会図書館の次世代デジタルライブラリーにアップされていることを知った。

<https://lab.ndl.go.jp/dl/book/1233041?page=14>

brda-ñini 古体

brda-gsar 新体

とありますが、チベット文字の正書法の新旧を表しています。チャンドラダスの辞書をめくると、下のほうはいいのですが、上はただしくは **brda-rñin**と書くべきように思います。(Wylie 方式だと **brda-rnying**)

右側上部には

dbu-čan 有頭

p136 med-čan? 無頭

dbu-med

と書かれていますが、これはチベット文字のフォントスタイルを述べています。**dbu-can** はラサ方言っぽく発音すると、ウチェンといますが、頭がついているスタイルで、ナーガリの文字でいえば、ちょうどシローレーカーがちゃんとしている感じの形です。対して **dbu-med** はラサ方言ぽくいうとウメといますが、これは直訳の通り、頭がない、つまり、ナーガリ的にはシローレーカーを書かないタイプです。**dbu** は頭を意味します。

その下の行に「i, e の前の m は my になる」とありますが、これは古い綴り字が my であったわけで、今の綴り字ではいずれも y を書かない形です。

mi < myi 人

とありますが、これはその通り左側のほうが新しい綴り字です。大体はそれでよいようですが、夏樹先生のメモのように **me tog < men tog** と書かれているのは大事で、これは「花」を意味しますが、古い形でも **myen** となっていないところがポイントですね。

その下の **da-drag-čan** というのは「隠れた d」というタイプの綴り字法のように、古くはチベット文字では **n, r, l** のうしろに **d** の字を書く書記法があったようです。

その下の前添字は、私は「添前字」と習いましたが、古代チベット語における接頭辞を表したり、声調の高低などを表記したと考えられます。ただ、正書法の変遷に伴い、脱落したりしたものもあるようです。**mig** 「目」は今はこのように書きますが、古くは **dmyig** でした。

ただ、その下の **gsod** は「殺す」を表しますが、**sod** はその命令形「殺せ」を表すと思われます。どうしてこのような書き方をされたのかは不明ですが……。屈折することで添前字がなくなるというプロセスに思います。

以上が林教授からのコメントである。

p.35 冒頭に「鄭振鐸：文学大綱」とある。コトバンクによると、鄭振鐸は「中国の文学史家。福建省長楽の人。筆名は西諦、郭源新など。1919年瞿秋白(くしゅうはく)らと雑誌『新社会』を創刊、21年茅盾(ぼうじゅん)らと「文学研究会」を結成、その機関誌『小説月報』や、『文学季刊』『世界文学』などの編集にあたり、多くの作家を世に出した。一方上海の暨南(きなん)大学などで教壇に立ち、文学史の研究に従事。抗日戦争中は上海にとどまり、戦後は週刊誌『民主』に拠って国民党を批判し、人民共和国政府に参加。文化部文物局長、科学院考古研究所長などの要職にあったが、飛行機事故で死亡。主著『文学大綱』(1927)、『中国文学史』(34)」とあり、このノートのテーマと大きく外れる。

本ノートに登場したのは、「ビルマ王朝」からはじまって、パスパ文字碑文、モンゴル王朝、オスマントルコ、中国語、満洲語、女真、ウイグル、朝鮮語、奈良朝日本語、そしてチベット語と種々多彩

である。このノートからは東洋言語学を学んだ父の姿が浮かぶ。

13. 0334 古事記音韻表記関連。

全 34 頁 (ただし、偶数頁は白紙が多い)。

pp1-7 上つ巻 (大国主命) にでてくる「夜知富許能 加微能美許登夜」ではじまる歌を取り上げている。基本的に、万葉仮名で書かれた『古事記』を音韻表記している。偶数頁に注が付されているが、p1 の注が p.2 となっている。

pp9-15 大国主命に出てくる「伊能知波 那志勢多麻比曾」以下の歌。

pp17-25 大国主命に出てくる「奴婆多麻能 久路岐美祈斯遠」以下の歌。

pp27-33 大国主命に出てくる「夜知富許能 加微能美許登夜」以下の歌。

14. 0436 廣韻関連。

全 70 頁。(コメントできる素養がないのでそのままにしておく)

15. 0438 数詞関連。

全 30 頁。ただし、ノート部分は p.28 までで、あとは挟まれた紙きれである。表紙には算術練習帳と書かれており、「第 XIII 学年 XIII 組 長田夏樹、*Ocaga-Hamyku*」と自筆で書いている。戦前に書いたノートである。算術練習帳なので、数詞を書いたという、父特有の駄洒落かもしれない。

p.1 「15 pešigerma 16 axltigerma …」とあるのは Mannerheim (1911:66) から引用した「The Sarö-Yögurs in Machuangtzü」の 16 から 22 の数詞である。22 という半端な数で終わっているのは、Mannerheim (1911:66) の一覧表に 22 までしか載っていないためである。Mannerheim (1911:65) には 1 から 15 までの数詞が掲載されているので、この頁の前にそれが掲載されていたが、脱落してしまったのかもしれない。

p.2 一番上に「Ein fragment mongolischer quadratschrift」とある。これは Ramstedt (1911) の論文で、Suomalais-Ugrilaisen Seuran Aikakauskirja 27 に掲載された論文である。以下からダウンロードできる。

<https://ia802807.us.archive.org/26/items/aikakauskirjav27/aikakauskirjav27.pdf>

論文のパスパ文字のところは写真でよく見えないが、それを p.2 上段に写し、その下には Ramstedt (1911:2) に掲載された転写を写し、p.3 には Ramstedt (1911:3) の正書法による転写を写し、その下には Ramstedt (1911:4) にあるドイツ語による訳を掲載している。

p.4 一番上に「Zwei uigurische runeninschriften」とある。これは Ramstedt (1914) の論文で、正式には「Zwei uigurische Runeninschriften in der Nord-Mongolei ; aufgefunden und mit Transskriptionen, Übersetzung und Bemerkungen veröffentlicht」で、Suomalais-Ugrilaisen Seuran Aikakauskirja 30 に掲載された論文である。これはすでに「8. オルコン碑文関連」で指摘したように、以下からダウンロードができる。

<https://ia902806.us.archive.org/17/items/aikakauskirjav30/aikakauskirjav30.pdf>

論文では A. Text B. Transskription der buchstaben C. Transskription der wörter D. Übersetzung と分けられている。

pp4-9 はすべて Ramstedt (1914) の写しである。父は 1. のルーン文字、文字転写、単語ごとの転写、

翻訳(ドイツ語をそのまま載せている)を番号ごとに分けて原文を写している。父はその当時入手困難だったと思われる、ラムステッドの論文をどこで手に入れてノートを取ったのか。もちろん、東京外語の図書館の可能性もあるが、たぶん、菊池慧一郎先生のところで読んだのではないだろうか。

p.10 一番上に「磨延啜葛勒可汗 第 11 章」とある。葛勒可汗とは、コトバンクに以下の説明がある。

「ウイグル帝国の第 2 代カガン (在位 747～759)。本名は磨延啜 (まえんてつ)。唐から「英武威遠」の号を贈られた。父のクトルク・ボイラ (骨力裴羅), すなわちキュル・ビルゲ・カガンを助けてウイグル帝国の建設に功績を立てた。755 年から安史の乱に悩む唐に援軍を派遣し, 唐と密接な関係をもつにいたった。シネ・ウス碑文は突厥文字で書かれた彼の紀功碑文である。」

pp10-12 このシネ・ウス碑文を抜き出している。シネ・ウス碑文は上述の Ramstedt(1914)に掲載されているし、また日本の研究者による「シネ・ウス碑文訳注」まで出ている。ここに写した碑文の転写がそれとは異なるものようである。その出典は見つけられなかった。

p13 「原日本語の構成 金田一京助」と冒頭にあるが、この論文は『日本文化史大系』(1938 年)に掲載されたものである。

p.14 一番上に「Keilschrift シュメール語」とある。Keilschrift とは楔形文字のことである。夏樹のノートには Stephen Langdon A Sumerian Grammar and Chrestomathy と記されているが、この本は正式には「A Sumerian Grammar and Chrestomathy with a vocabulary of the principal roots in Sumerian and a list of the most important syllabic and vowel transcriptions」といい、1911 年パリで出版されている。この本はグーグルのサイトから PDF をダウンロードすることができる。

父がうつした数詞は Langdon(1911:117-119)からとったもので、70 以上に記載がないのは 60 進法であるために Langdon にも記載がない。

p.15 引き続き、Langdon(1911:109)を引用してシュメール語の代名詞を記載している。

p.16 一番上に「太田亮 日本古代史新研究」と記されている。この本は昭和 3 年(1928)出版されたもので、国会図書館デジタルコレクションで読める。ウィキペディアによると、「太田 亮 (1884 年 7 月 1 日 - 1956 年 5 月 27 日) は、日本の歴史学者。氏族制度の研究で知られる。」

p.17 には「支那数詞」として、「I. yit(yat,kat), 谷 kok 浴 yok 国 kok 城 yuk, II. ni < dai, nei, III. sam ,tam, IV. si < luk, su, V. ngo, VI. lok , luk, VII. sat (sit), VIII. pat, IX. ku <kuk, X. sip < tap」と記載されているが、出典はわからない。

p.18 一番上に「突厥毘伽可汗碑文の紀年(東洋学報) 岩佐精一郎」とある。この論文は『東洋学報』第 23 卷第 4 号昭和 11(1936)年 8 月発行である。こちらについても、PDF ではなく、テキストとして以下のサイトで読める。

<http://otuken.world.coocan.jp/reference/bilgekaganhibunnokinen.htm>

pp19-20 この岩佐論文からの抜き書きである。

p.22 には「神」とあって、o-Stämme そして右には「nymó」と見出し語があり、i-Stämme と記されている。この言語には単数、複数に加えて、双数 (Dual) がある。一番最初に掲載されているのが、単数主格 bogr である。これらを踏まえて、Wikitionary を引いてみると、Lower Sorbian が出てくる。低地ソルブ語とはスラブ語派に属する言語で、ドイツ東部で話されている。父の記載したものには N(ominative). G(enitive). D(ative). A(ccusative). V(ocative). L(ocative). I(nstrumental). が掲載されているが、この低地ソルブ語には Vocative がない。以下に、Wikitionary を引いておく。

Declension of bog

| | Singular | Dual | Plural |
|--------------|----------|--------|-------------|
| Nominative | bog | boga | bogi |
| Genitive | boga | bogowu | bogow |
| Dative | bogoju | bogoma | bogam |
| Accusative | boga | bogowu | bogi, bogow |
| Instrumental | bogom | bogoma | bogami |
| Locative | bogu | bogoma | bogach |

pp.23-24 こちらもパラダイムが載っているが、やはり低地ソルブ語に近い。低地ソルブ語の人称代名詞を以下に Wikitinary より引用する。

Declension of the first-person pronouns

| | Singular | Dual | Plural |
|---------------------|----------|------|--------|
| Nominative | ja | mej | my |
| Genitive | mě | naju | nas |
| (after preposition) | mnjo | | |
| Dative | mě | nama | nam |
| (after preposition) | mnjo | | |
| Accusative | mě | naju | nas |
| (after preposition) | mnjo | | |
| Instrumental | mnu | nama | nami |
| Locative | mnjo | nama | nas |

p.25 Polnisch とあり、ポーランド語の Be 動詞のパラダイムが載っている。以下に、Wikitionary から引用しておく。

| | singular | | | plural | |
|---------------|-----------|------------|--------|------------------|-----------|
| | masculine | feminine | neuter | virile | nonvirile |
| person | | | | | |
| infinitive | być | | | | |
| present tense | | | | | |
| 1st | | jestem, -m | | jesteśmy, -śmy | |
| 2nd | | jesteś, -ś | | jesteście, -ście | |
| 3rd | | jest | | są | |
| past tense | | | | | |
| 1st | byłem | byłam | | byliśmy | byłyśmy |
| 2nd | byłeś | byłaś | | byliście | byłyście |
| 3rd | był | była | było | byli | były |

スラブ語に言及しているのは八杉貞利にならった時か、木村彰一にならった時かに関心を寄せるようになったものと思われる。

p.26 冒頭に「Indonesien common Puyuma Sumba Tagalog」とあって、今でいう Austronesian の数詞が載っているが、その引用元はない。

p.27 一番上に「台湾蕃語の数詞法の二例 小川尚義」とある。この論文は金沢博士還暦祝賀会編

(1932)『東洋語学乃研究：金沢博士還暦記念』三省堂に掲載されているが、これは国会図書館デジタルコレクションで読むことができる。「21, 22, 31, 32」については小川尚義(1932:574)からの引用であり、「ordinals」の「第一、第二、第三」は小川尚義(1932:575)からの引用である。この小川論文には p.26 に掲載されている数詞はない。

p.27 冒頭に「北奥地名考 金田一京助 東洋語学及研究」とある。この論文も金沢博士還暦祝賀会編(1932)『東洋語学乃研究：金沢博士還暦記念』三省堂(459-551頁)に掲載されている。大変長い論文で基本的に地名をアイヌ語でどこまで解釈できるかを論じている。ただし、父が関心を持ったのは富士のアイヌ語「火」起源説ではなく、朝鮮語 pul との関係を読いたところ(金田一 1932:465)である。ノートには金田一の論文まとめの下に、梵字が書かれている。

p.28 三つの言語の数詞が書かれていて、最後のものは 15 頁(左)に載っているタガログ語の数詞である。一番目と二番目はインドネシア語とマレイ語だと思われる。

p.29 こちらもオーストロネシアの数詞と思われる。アラビア語表記のマレイ語や Kw とあるのがカウイ語の数詞である。Bat. とあるのはバタク文字で書かれた数詞、Mak. とあるのはマカサル文字で書かれた数詞、また Tag. とあるのはタガログ文字(ローマ字表記以前に使われていた)の数詞で、Sund とあるのはスンダ文字で書かれた数詞である。いろいろな文字に興味を懐いていたことがよくわかる。

16. 0456 中国語音韻関連。

全 64 頁。表紙なし。中国語の方言、広東語などの音韻が主で、筆者には歯が立たないので、これ以上ふれない。なお、裏表紙に「昭和二十三年度第二、四半期用紙」とあるので、時期としては 1948 年頃のことであろう。

17. 0457 中国語方言関連。

全 76 頁。表紙なし。71 頁までがノートで、あとは挟んであるメモ書き。こちらのノートにも「昭和二十三年度第二、四半期用紙」とある

18. 0475 甲骨文字関連。

全 22 頁。表紙はあるが、タイトルはない。

pp1-2 甲骨文字に関する書誌。pp3-4 には黄帝から始まる系譜が載っている。父は王朝系譜をあらかじめ書き残していることがわかる。

19, 0930 中国語音韻関連。

全 52 頁。表紙あるが、タイトルなし。47 頁までがノートで、後は挟んでいるメモ書きである。こちらもコメントできることはない。

20. 0937 獬豸考。

全 15 頁。表紙に「獬豸考」とタイトルがある。

獬豸とはウィキペディアにこうある。「獬兪(けんいん)は、中国の北方と西北方に位置した古代の民族。また獬兪、獬豸などと呼称される。その形跡は金文と先秦古籍において最古のものを見ることができ、ときには「昆夷」などの名とともに混ぜ書きされるが、居住地区が同じためである」。

父が北方諸民族に関心を持ってきたことがよくわかる。

pp.1-5 (ただし、p.2, 4 は白紙) は詩経の中に出てくる「采薇采薇」を写したものである。以下のサイト¹⁸に白川静訳が掲載されているので、それをコピペしておく。

作品名 采薇采薇
収載書名 『詩経』「小雅 鹿鳴之什」
訳者名 白川静
訳書名 『詩経雅頌 1』(『東洋文庫』635)

采薇采薇 薇を採り 薇を採る さ薇(わらび)を 採りに採る
薇亦作止 薇も亦作(おこ)れり さ薇も もえ出づる
曰歸曰歸 歸りなむ 歸りなむ 歸りなむ 歸りなむ
歳亦莫止 歳も亦莫(く)れぬ 年もはや 暮れそむる

靡室靡家 室靡(な)く 家靡きは 家離(さか)り さすらふも
玁狁之故 玁狁(けんいん)の故なり 玁狁の 故ぞかし
不遑啟居 啓居するに遑(いとま)あらずは 安らぐに ひまなきも
玁狁之故 玁狁の故なり 玁狁の 故ぞかし

采薇采薇 薇を採り 薇を採る さ薇を 採りに採る
薇亦柔止 薇も亦柔(わか)し さ薇も しなやかに
曰歸曰歸 歸りなむ 歸りなむ 歸りなむ 歸りなむ
心亦憂止 心も亦憂(うれ)ふ わが心 憂はし

憂心烈烈 憂心 烈烈として わが憂ひ いやましに
載飢載渴 載(すなわ)ち飢ゑ 載ち渴く 身のかつれ 渴くごと
我戍未定 我が戍(まもり) 未だ定まらず わが戍 成らざれば
靡使歸聘 帰聘する所靡し 家問はむ すべもなし

采薇采薇 薇を採り 薇を採る さ薇を 採りに採る
薇亦剛止 薇も亦剛(かた)し さ薇も たけにけり
曰歸曰歸 歸りなむ 歸りなむ 歸りなむ 歸りなむ
歳亦陽止 歳も亦陽(た)けたり 年もはや 更(ふ)けにけり

王事靡盬 王事 盬(や)むこと靡(な)し えだちごと 果てなくて
不遑啟處 啓處するに遑(いとま)あらず 安らぐに 遑なし
憂心孔疚 憂心 孔だ疚(うれ)ふ わが憂ひ いやませど

¹⁸ <http://hanamoriyashiki.blogspot.com/2015/04/32.html>

我行不來 我が行 來(ねぎら) はれず 勞(ねぎ) らひの こともなし

p.6からはわら半紙に書かれている。いずれも「獫狁」に関連する抜き書きである。p.6には前漢書『匈奴伝』とある。

p.7 の冒頭には「采薇遣戍役也文王之時西有昆夷之患北有獫狁之難以天子之命命將率遣戍役以守衛中國故歌采薇以遣之出車以勞還杖杜以勤歸也」¹⁹が記されている。毛詩第九卷にでてくる。その後の引用は漢匈奴伝(齊詩)、史記周本記(魯詩)からの抜き書きである。

p.8 前後の頁がないが、「獫狁」「匈奴」がどう発音されていたかの考察。

p.9 「アルタイ民族」という表題がある草稿である。これが発表された形跡はない。

pp.10-15には「匈奴、其先祖夏后氏之苗裔也」から始まる『史記』匈奴列伝第五十を抜き出している。吉本道雅(2006)「史記匈奴列伝疏証：上古から冒頓単于まで」『京都大学文学部紀要』45:33-83には「便宜的に分段」し番号が振られているが、夏樹が抜き出しているのは(1)~(30)であり、吉本には(31)までが引用されている。

以上、1~20のノートブックの解題である。ただし、中国語関係については濱田神戸市外大准教授が執筆予定である。

4. おわりに

こんなノートブックの解題を書く意義はあるのだろうか。また、栗林さんはじめ多くの方々を巻き込んでいいのだろうか。

ここまで解題を書いていて何度も自問自答を繰り返した。栗林さんに直接この疑問をぶつけたこともあったが、「私の知らない文献情報が載っていて役に立ちますよ」と慰めの言葉をかけられ、何とかここまでの解題を書き上げたところである。

人文学の危機が叫ばれている。

確かに、時代は変わった。こんな父がやった碑文の解説や日本語の系統を知ることが何の役に立つのか。ノウハウや生活に直結した研究でないと役に立たないと誰が言い出したのか。文科省の役人あたりが言い出したことなんだろうが、それに応えられないでいる人々が多いから、ますます「役に立つかどうか」で学問の価値が決められていく。生活に直結していないということ言えば芸術だって同じだが、音楽を聴くことや美術鑑賞をすることは価値があるとみなされている。

大学における教育も問題である。文献を読むことを強要するとパワハラだと言われかねない。まして服部四郎のように「君はこれをやりなさい」と担当言語を割り振るようなことはアカハラとして認定されかねない。筆者はここ二、三年、神戸市外大で大学院生を教えているが、日本人の院生がほとんどいない。中国人がほとんどである。日本人学生の間で、大学院に進んで研究生活に入ろうという意欲がほとんどないように見える。状況はかなり厳しい。

一方、父の時代、学問をすることが絶対的な善であった。筆者は末っ子で生まれ、しかも言語障害児だったのであまり言われたことがないが、兄などが父の勉強の邪魔をすると「日本の学問が遅れてしまう」と怒ったのだという。その成果がこのノートブックなのだろう。その割に、全般につまみ食いの的に書かれたものが多く、何かを体系的にまとめるということはなかった。その点は惜まれる。

¹⁹ 京都大学拓本文字データより。

ただ、こうした体系的な仕事をやる偉大なる学者が同じレールを走っていて、契丹語や日本語系統論について何かを書くと、それを読んで反応する先学がいたという事実は非常に大きい。筆者などは、日本では誰もやったことのないムンダ語を専門とし、二度、ムンダ語文法を書いたことがあるが、英語だということもあって、はたして日本人で何人の方が読んでくれたのか、数えられるほどではないだろうか。

父がパスパ文字碑文を山崎忠と一緒に研究していた頃、夜中に忠さんが突然飛び起きて、「解説できた」と叫ぶので、聞いてみると、それでは解説にはならないということがよくあったのだという。父がよく懐かしげに語っていたのを思い出す。また、父自身は学問をやること、つまり研究に没頭することが楽しかったのだろう。刻苦勉励とは程遠い姿がある。何か新しことを学問的に発見する。父はそのことに大いなる喜びを感じたのだと思う。

父が学問をやっていた時代の雰囲気を知る。それがこの解題を書いた意義に違いないと自分を納得させているところである。

アップされたノートが 94. ある。今回 20. までの解題を書いた。最後まで書けるかどうかは自信がないが、中国語関係を書いてくださる濱田さんをお願いした以上、なるべく解題を最後まで書きたいと思っている。